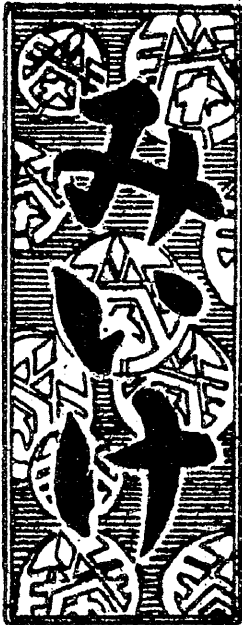


秋闘から期末の闘いへ

炭鉱労働者の生活擁護へ全力



発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市入船町1番地
電話(53)3033-4
編集兼人 杉本 一男
発行人 杉本 一男
半年間 1,200円 送料共
振替口座番号
労金大牟田
0968946-005

公判お知らせ

11・9 三池大災害裁判公判
十一月十九日午後一時から、福岡地方裁判所。(46回)
9・28 坑内火災裁判公判
十一月十六日午後一時から、同右裁判所。(39回)

大地評大会

日時 十一月十四日 午前十時
場所 労働福祉会館中ホール
福岡県労災連大会
日時 十一月十四日 午前十時半
場所 大手門会館(県評)

炭労大会で要求決まる

退職手当 坑外三十年・期末手当五十万円

坑外員の定年延長要求も

北炭夕張新鉱閉山反対闘争の重大な山場と重なり、秋闘闘争への取り組みが遅れていましたが、十月二十八日炭労第百一回臨時大会が開かれ、夕張新鉱の闘いの総括を行うとともに、当面する退職金などの秋闘闘争の要求を決定しました。秋闘闘争は二十九日要求書提出後、直ちに交渉に入り十一月月上旬の解決をめざします。また下期期末手当は、前期につづいて五十万円の要求が決まりました。

- 炭労臨時大会で決定された秋闘闘争の要求の要点は次の通りです。
- 一、退職手当
イ、坑外員勤続三十年で二十万円とする。
ロ、現行健康等級二十五級を二十八級とする。
ハ、自己都合退職の場合も健康等級二十八級とし、基礎日額への乗率(九パーセント)を撤廃する(二に増加する)。
 - 二、救護隊手当
イ、隊員手当 一万円
ロ、練習手当 千九百円
ハ、召集手当 四百七十円
ニ、その他、弔慰金など。
 - 三、その他、弔慰金など。
 - 四、定年延長
イ、坑外員は第三種受給権取得者を除き六十歳まで延長すること。
ロ、坑内員で第三種受給権未取得者は本人の選択で延長する。
 - 五、休業補償は労災法補償を含む百パーセント支給すること。
ハ、管理四の認定者は定年まで解雇しないこと。
ニ、その他、弔慰金など。
 - 六、坑外員は第三種受給権取得者を除き六十歳まで延長すること。
ロ、坑内員で第三種受給権未取得者は本人の選択で延長する。

下期期末手当要求については、次のように決まりました。
イ、在籍鉱員一人当たり平均五十万円を支給すること。
ロ、その他、退職者取扱など。
以上のように決まりましたが、いずれも切実な要求です。満額獲得めざして頑張りましょう。

よみがえれ夕張

夕張新鉱閉山を承認

炭労臨時大会

十月二十八日に開かれた炭労臨時大会で、夕張新鉱閉山・全員解雇、労務債八十九億二千九百万円の支払いなどの、十月八日早朝の要結内容を含む、「夕張新鉱閉山反対闘争の総括」を討議し、承認しました。

この閉山作業が終了することで、来年四月といわれる新会社発足までわずかな期間で保坑作業がつづけられることとなりますが、新会社発足については不安材料も残されています。

就職先は... 相談所開く

夕張新鉱就職あっせん委員会と夕張公共職業安定所による再就職についてのアンケートが行われましたが、二十六日集約された結果では約千五百人のうち約千二百人が炭鉱への再就職を希望し、残り約三百人は炭鉱以外の就職や職業訓練所を希望したと伝えられています。

また二十六日に開設された清水沢の臨時就職相談所では、午前九時から午後四時まで、一時間ごとに保坑要員として採用された人員は、職員十六人、坑内員三十三人、坑外員十三人、準備(よう)員六人、計六十八人です。

これらの人員は、本採用として新会社発足まで保坑作業に当たり、これからさきの就職、そして生活ですが、真谷地・幌内・北炭関連への不安が強まっています。

十月九日閉山、十四日全員解雇となった夕張新鉱では二十六日、坑内の閉山作業が終了しました。夕張新鉱の坑道は約三万一千メートルありましたが、堅坑と約三千メートルの閉山作業は完了しています。

不安残し 密閉終了

十月九日閉山、十四日全員解雇となった夕張新鉱では二十六日、坑内の閉山作業が終了しました。夕張新鉱の坑道は約三万一千メートルありましたが、堅坑と約三千メートルの閉山作業は完了しています。

怒りこめ集会へ

三井の保安サボによって昭和三十八年十一月九日、三川鉱炭じん爆発で四百五十八人の死者と、八百三十九人のCO患者を出したという大災害を引き起こされてから十九周年を迎えました。

災害の原因と責任を追及し、遺族補償とCO患者の完全治療と補償を要求したにもかかわらず、また損害賠償を求める民事訴訟も九年となり、四十五回の公判を経



三池大災害から19年。抗議集会への参加を呼びかけるポスター。

11月9日 午後1時開場 大牟田市民会館
午後1時半開会
三池労組・三池主婦会 総評・炭労



10月8日の妥結によって閉山、会員解雇が決定。閉山を伝える新聞各紙。

地底

●急に冷えた。こたつやストーブを出す家庭も多かったが、夕張からは雪の便りが届いた。ついこのあいだまで、きいていなかったのである。閉山から一月、九日は三池大災害の十九周年に当たる。

●「今よくなる」と七年前がまんした労働者とその家族たち。九十三人の命が奪われ、いま残った人たちはヤマを追われ、未払いの退職金、賃金、期末手当など百二十三億円のうち三割は削られた。それも受けとれるのはまだ先のこと。寒さの中で生活はまさにピンチ。

●北炭の主、政商、ドンといわれた萩原吉太郎は、「閉山は一つの宿命」と、反省の色はない。膨大な私財を投じたという話もない。これまで投入された国家資金三百億円も水のアワ。閉山に必要な国の支出はおおよそ百億。そして再建となれば数百億。まさに常識をこえる「生と死」「過去と未来」が交錯するのである。

●一九七六年十月の幌内炭鉱でのガス爆発のあと、萩原は衆議院石炭委員で、「山が悪いのではなく人が悪かった」と述べた。要するに保安の手抜きのことだが、そうさせる「無責任の体系」が炭鉱に実在し、石炭産業を崩壊させている事実を目を向ける者も少ない。

●「閉山」によって第七次石炭政策は崩れた。石炭切り捨てのいらぬ崩壊過程が、はたして「歴史の必然」なのだろうか。断じて夕張はよみがえらねばならない。「再開発に最大限の努力を」と言った安倍通産大臣は、鈴木首相が突然投げ出した総理の座をめぐる「イス盗り合戦」に、昼も夜もない。